

起線海洋観測を一九五五年三月八日から実施した際、また第六点へ位置を落とした。人間の島と見なす。

て初港が開始されたと思われる。佐渡伸水城が全く存在しないので、大羽漁の豊山へ特に魚群の移動は一時に豊山に集中する。

1955. V

(1) 第52号 連絡ニユース

日本海区水産試験研究

# 連絡二二一ス

日本海

(51)

研究九枚としての  
未利用漁獲物

加藤源治

現在実施されている水産資源の研究は大体に於いて個々の魚種別の測定的と推計的の所謂資源解析に主力が注がれている。しかし、ここ数年この研究体制の実施によつて改めて改められたことは、この種の研究方法だけでは資源研究上解決できない面が多々あるといふことは、やはり近い将来に収拾することのできぬ壁にぶつかるようならざるがするのである。だからこの原一刻も早くこれまでの調査方法 자체を客観的に再検討して、さらに新らしい研究分野へ飛躍しなければならないということは、現在直接に資源の研究を担当している多くの研究者たちが暗黙のうちに体験しているひとつ共通した懸念であろう。

水産資源の研究は広汎な海岸を対象とした実に複雑なものであつて、人為的・選択的な漁獲という謂われは水山の一角だけを眺めているほどの調査研究であるから同じ農林省所屬であつても直接視覚に訴えて研究ができるものである。

昭和二十八年度の農林水産統計によれば、

第52号

新潟市万代島  
日本海区水産研究所

印刷  
株式会社新潟出版社  
昭和30年5月1日発行

某面とは全然別個の容積もつた科学領域である。換言すれば、水産資源の研究はそれ自体独立したもので、各種の他の自然科學の総合的な活用によつて僅かにその姿の一斑を窺知しているにすぎない。というのが眞理のない現在の実状である。

最近水産資源研究の一歩に生態系といふ概念を導入した研究動向がみられてきたが、これは相互に関係のない個々の魚種について実施されている現在の資源研究にとって内省すべき問題を提起している。しかしこれとても現地の段階においては重要魚介類相互間の群衆的な研究があつて、一般生物との相関についてはほとんど問題外となつてゐる。

いま、全国の各水試で実施している底曳網の試験操業の実態は資源的魚介類の多寡が問題の中心であつて、その同時に場所による生物学的属性につけてはシヤマウチのごとく一概の生物についてはシヤマウチのごとく一概もされずには再び海上に棄られていようであさきない壁にぶつかるようならざるがする。この点が少なくとも調査研究を手本の使命としている水試当局に一考を煩はして、いただきたいのである。底曳網によつて漁獲されるのは有用な魚介類のほかに種多な生物群衆を含むものであつて、これらの所謂資源外の廃棄物は生物学、とくに分類学や生物地理学を専攻する研究者にとってはまことに得がたい豊富な貴重資料となるのである。このよ

日本全国の中、小型底曳網の着米数は三五六統、同航海数は実に二三六四回にも及んでいるが、これらの操業においても無価値なものとして無造作に放棄されるこの生物学的資源の量は實に莫大な量に達していよう。この点について前記水試は勿論のこと全国の漁業者の中若手の理解ある方々の御協力を得て、これらの廃棄物の研究資源化について具体的に計画されるとしたら、これはひとり生物研究者の限りない既びのみに止まらず亦延いては水産資源の研究に対しても大きな利益となつて還元されるであろう。

以上、思いつくまゝに現在の資源研究についての私見を述べたが、この種の問題に対する立場に立つと底曳網によるこれら廃棄物も有用な研究資源として更生され、活用されるのである。

(日本水研資源部長)

利用者担当会議

四月六・七の両日、沼津で利用担当者会議開催。研究室一課長、係官、各水研利用部長及び担当官、各大学関係の教授等その他合計約五十名が参加した。

四月六日には三十年度予算の説明、蓬入可能な設備起減等の説明、二十九年度の業績の発表、各水研の希望事項の陳述があつた。

昭和三十年大羽イワシの春漁況

予報会議開かる

本ニユーヨーク第五十一号に既報の通り、首題

同会議には、富山を除く石川以北の

卷之三

ふうなや二次子報原案となつた。(日本研)

第二次漁況予報

(3) 別刷の交換  
研究部二部 各本研は科単位

四月七日には、各班に分れて、経過報告の検討・運営方針、研究計画の発表の検討を行

出席した。

長崎で開催予定の水産学会大会の際に次回

長崎で開催予定の水産学会大会の際に次回の班回話を聞く、次期の班長は西海区水研利用部長とする。本年度の主目標は低温に依る鮮度保持の研究とする等を決定した。

班の名前を資源化學研究班と変更し、生化学的研究に漸次方向を変更する。

(2) 生殖腺熟度に関する研究  
等を当面の主目標とする、尙、研究方法等についての打合せ連絡を行つた。

昭和三十年大羽イワシンの春漁況  
予報会議開かる。

本ニユース第五十一号に既報の通り、首題の会談は、四月九、十の両日、山形本試で行われた。同会談には、富山を除く石川以北の五本試、次日水研が集まり、まず日本水研下村の報告後、各所の報告がなされ、その後、各所の意見交換がなされた。

よるなヤニ次予報原案となつた。(日本水研)

ヤニ次漁況予報

い三月下旬以降の海況の変化からみて、今春北部日本海の大粒イワシ好漁場は能登へ、鐵山崎・韓島・長手崎・及び平島、糸島・佐渡崎・崎を結ぶ海域の二カ所に形成される。

(2) なかでも能登漁場は終漁期が幾分早目となるであろう。また佐渡以南では魚群の移動が早いが以北では滞留するであろう。

(3) 佐渡以北の初漁期は従来と異り、佐渡、山形、秋田ヒ余り差がないであろう。

(4) 初漁期は昨年より遅らか早目となるが、能登を除いて漁場は幾分沖合に形成される公算があるのを、正月中旬の観測結果に注意され

(5) 男鹿半島以北の漁況は好漁とは思われないが青森水試が五月一日船作崎線と並んで權限寄線の観測を行う予定なので、それによつてはつきりする。

能登に指向する冷水域は一〇〇米以深において、東方へすなわち佐渡を指向しているがこれは四月上旬欠測のため判定不能である。しかしこれは状勢によつては佐渡西岸、或は佐渡海峡に好漁場が形成されるかしれない。何れにせよ四月中旬の観測をまたねばならないし、また入道崎沖冷水域の様様によつては局地的であるが、新潟、山形の県境沿岸が豊漁となる公算である。

なお右会誌後の北部日本海海洋観測(四月十四日—二十四日の結果、これらに次のように述べる。

第三次漁況予報

四月上旬までの海況では、次の事が漁況上懸念されていた。

(1) 入道崎地先の冷水域が発達しすぎて、新潟以北沿岸部が冷水におおわれるのではないかとの心配である。佐渡沖冷冷水域が完全出現しないといひ大和港方面から琵琶湖北部を指向していった大冷水域が櫛削崎沖から東方佐渡へ向う形勢にあつた。

しかしこれらの懸念は何れも解消し、まず頗るな海況となつてしまつた。したがつて、主漁場は依然として佐渡—飛島海域に形成される公算にある。秋田県では(1)と(2)、ナリシ岸崎りが漁場となるが、その他ではもしこのまきの海況であれば幾らか沖合に分散する事も考えられる。

予者と名前と資源化學研究室と変更し、生化  
學的研究に漁次方向を変更する。

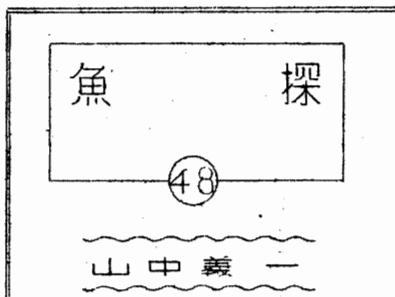
1955.△

(3)

第52号 二ユース 連絡

也とりどりの大漁旗で滿船飾に装われてすらりとならんだ新造船、何とはなしに勇ましいりズムの軍艦マーチや相川音頭、果ては流行のお富さんまでが加つて伴奏は陽気な雰囲気を醸して新潟港の新らしい建設途上の水産物座揚用岸壁は時ならぬ賑いを見せてる。四月二十七日、北洋出漁船團の壮途につくの日である。天気もよく风もなご、気温も快く絶好の出航の日である。雅多み狂想曲が、虫の光に曳つた、と向もなく万次郎の叫び、先頭の真白い船から、順次に岸壁を離れた。五色の灯一つが陽光にキラ～と燃き、やがては長く尾を引いて裾を水面に残している。見送る人と送られる人との胸にはどのような想いが通い、去来していることであろうか。見送りの船、船、船、県の衆彦丸、海上保安庁の巡視艇、新潟鐵工所の船等々と一緒に汽笛吹奏、海に生きる者たちの間に通う祝福と海路平安の祈念であろう。八重の船は岸をやゝ離れ、やがて体制を整えて順次に港内を一周し始めた。私共が今やいる万代島の海近くを順次に通過する。船上の顔々、ある女性達の群している前では船の若者たちも一層熱狂的に手を振り帽子を振る。私もやゝ上気して手を振り壯途を祝福した。然しことに胸中に一抹のかゆが横切ることも禁じ得なかつた。即ち現在こうして花々しく送ら

れどりとりの大漁旗で滿船飾に装われてすらりとならんだ新造船、何とはなしに勇ましいりズムの軍艦マーチや相川音頭、果ては流行のお富さんまでが加つて伴奏は陽気な雰囲気を醸して新潟港の新らしい建設途上の水産物座揚用岸壁は時ならぬ賑いを見せてる。四月二十七日、北洋出漁船團の壮途につくの日である。天気もよく风もなご、気温も快く絶好の出航の日である。雅多み狂想曲が、虫の光に曳つた、と向もなく万次郎の叫び、先頭の真白い船から、順次に岸壁を離れた。五色の灯一つが陽光にキラ～と燃き、やがては長く尾を引いて裾を水面に残している。見送る人と送られる人との胸にはどのような想いが通い、去来していることであろうか。見送りの船、船、船、県の衆彦丸、海上保安庁の巡視艇、新潟鐵工所の船等々と一緒に汽笛吹奏、海に生きる者たちの間に通う祝福と海路平安の祈念であろう。八重の船は岸をやゝ離れ、やがて体制を整えて順次に港内を一周し始めた。私共が今やいる万代島の海近くを順次に通過する。船上の顔々、ある女性達の群している前では船の若者たちも一層熱狂的に手を振り帽子を振る。私もやゝ上気して手を振り壯途を祝福した。然しことに胸中に一抹のかゆが横切ることも禁じ得なかつた。即ち現在こうして花々しく送ら



### 大羽イフシについての懇談会開催される

四月四日新潟市の中洋漁業協同組合事務所において組合員約廿名と日本水研所員との間に大羽イワシ漁業に関する懇談会が開催された。

まず日本水研から本年度初春の海況とこれにもとづく大羽イワシ漁況予想について詳細な説明が行なわれ、ついで漁者の質問に移り両者がの間に熱心な質疑応答がなされ、約三時間の懇談会を盛会裡に終了した。

從来水産の調査研究がやゝもすると、漁業者の声を無視して研究者の一方的なみがたによつて行なわれている場合が往々にしてあつた結果その成果が漁者から遊離しがちであつたといわれている現在、日本海の漁民にとつて最も実際の深い春の大羽イフシについて今回のような懇談会がもたらされた事は今後の両者の緊密化を促進し、あわせて漁業と漁業者の実験と科学的な調査研究を併用して行なわなければならぬという意味で非常に有意義であった。

(日水研)

(日本水研総合調査室)

## 太平洋イワシ会議の開催

## 米国研究会より呼びかけ

米国におけるカリブオルニヤ、サージンの資源研究は各大字、合衆国政府、加州政府等の協同により行われているが、最近同研究を担当している米合衆国漁業野生物局ジョン・マ

ール博士は各部門の我が国のイワシ研究者にあてて次のように太平洋イワシ会議の開催をよびかけ意見を求めてきた。

世界におけるイワシ漁獲高および資源の変動は、極めて類似しておることが、一般に認められ、これを検討するためには、全世界のイワン資源研究者が相互に意見、資料を交換する会合をもつことが望ましいと考えられる。一九五五年秋には東京でインド太平洋漁業会議が開かれ、多数のイワシ研究者の来日が予定されるが、出来たらその会議の前後に太平

洋諸国イワシ資源研究者の会議を開きたいと思ふ。

(日・水研)

## 水産因係

## 迷泊亭子八五開催

水産因係は四月中各所で開催されたが、日本水産学会の研究発表は次の通りであった。

一、日本水産学会年会  
○漁場における向引キモ推定の一案

水産小委員長 鈴木 善  
委員 赤沢 正道  
加藤 常太  
市原 仁  
吉 道

三日本海洋学会年会  
○戦後日本海で発見された諸礁  
一九五二年日本海におけるプランクト

西村章依

四日本生態学会年会  
○佐渡海峡底層群集について  
岡地伊佐雄

下村敏正

○硬骨魚の小脳弁と遊泳行動について  
内橋 篤

島村初太郎

川原 善八  
赤堀 善入  
石原 拠  
塚原 善  
村田 善  
新井 善  
吉良 善  
藏山 善  
雄藏 善  
夫市 善  
大市 善  
佐々木 善  
野竹 善  
吉村 善  
新井 善  
英友 善  
俊郎 善  
善郎 善  
思 善  
捨 善  
吉 善  
道 善  
道 善  
幸 善

## 人事異動

## 第49回研究会開催

三月三十日 日水研講堂に於いて第49回研究会が開催された。  
なお演題および発表は次のとおり

○富山県水産試験場長松本利一氏は去る四月  
富山県北洋漁業協同組合専務理事に就任した。  
○富山県水産試験場長は今井尚信技術者が就任

## あとがき

下村敏正(開発部)

二、糸魚川市浦本漁業協同組合を訪ねて  
漁業整備の取扱期にある西頃域地方漁業の現状を浦本を例として述べる

尾形哲夫(資源部)

ひと兩ごとに柳の芽もふくらんでまいりました。こゝに第五十二号をお届けします。本ニコースはその名のとおり、試験研究の連絡会でありますので、とくに地方水試からの御郵便をお待ちしております。

(係)